大洋の子供をグングン伸ばす　家庭の時間を応援する

家庭学習応援だより

大洋小学校　教務部
令和4年5月27日発行
第２号

今月から大洋小学校でも月例テストが始まりました。年6回実施する予定です。基本的には、月末に実施するので、今頃はどの学年も終わっているのではないかと思われます。月例テストは、宿題の定着度を計ったり、基本的な学力を身に付けたりすることが目的です。そのため、普段の宿題に対する取り組み方が、点数になって現れます。

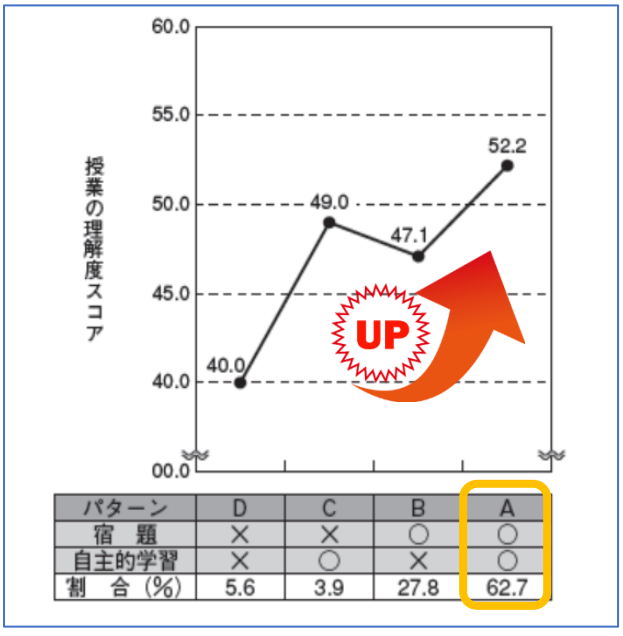
これは学校からのお願いですが、お子様のテスト結果を確認したら、点数を評価するのではなく、点数に現れた日ごろの取り組みを評価してほしいと思います。これは一見同じようで、まるで違います。前者は、「いい点とったね(喜)。」、「こんな点数とってきて(怒)！」という言葉に現れるでしょう。しかし、後者は、「毎日コツコツ頑張ってきてよかったね。」、「テスト前にちょっと集中できなかったね。」という言葉が出てくるはずです。保護者の皆様は普段、お子様にどんな言葉かけをしていますか？

宿題と家庭学習の両方で学力アップ

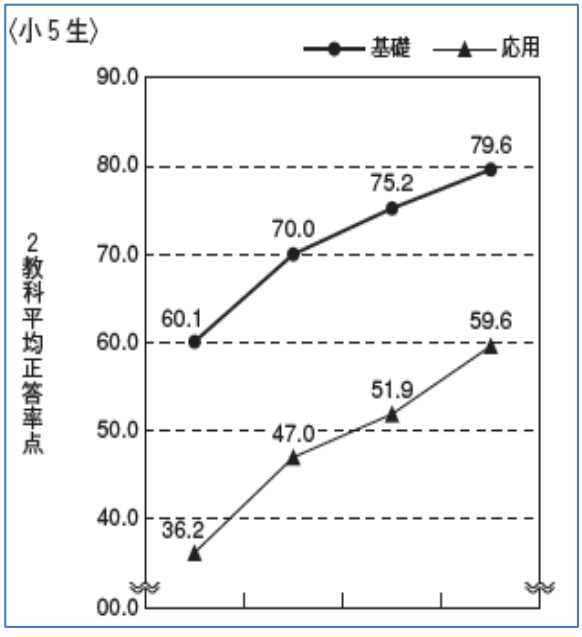
下図をご覧ください。小学5年生を対象にしたある調査では、宿題と家庭学習(自主学習)をどちらも取り組んでいる子供の学力はとても高いという結果が出ています。どちらも取り組んでいるのだから当然といえば当然でしょうが、それ以上に興味深い結果が出ていますので、ぜひご覧ください。

宿題と家庭学習(自主学習)に取り組んでいる子、取り組んでいない子をそれぞれグループ分けして授業理解度を数値化したところ、宿題と家庭学習(自主学習)を両方取り組んでいる子供は、宿題しか取り組んでいない子供よりも授業の理解度が5ポイント以上高いことがわかりました。さらに宿題と家庭学習(自主学習)両方に取り組んでいない子供とは、12ポイント以上もの開きがあったのです。

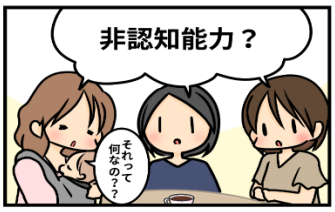
また、注目したい点は、宿題だけの子供よりも、自主学習だけの子供のほうがわずかに、スコアが高いという点です。確かに、自主学習は、自分に必要な学習を必要な分だけ取り組むのですから、宿題だけ取り組んでいる子供よりも学んだことが定着しやすいのかもしれません。さらに、どちらも取り組んでいる児童は、基礎的な学力の伸びよりも応用力の伸び率が高いことも見逃せない点です。前号でもお伝えしましたが、宿題を入口にして、子供たちが自ら考えて、学習に取り組む習慣を身に付けていくことが大切です。



パターン	D	C	B	A
宿　題	×	×	○	○
自主的学習	×	○	×	○
割　合（%）	5.6	3.9	27.8	62.7



今さら聞けない、非認知能力



冒頭でも触れましたが、親の言葉かけは、子育てにおいて重要です。また、子供の学習意欲にも大きく関係しています。親がどんな言葉でどう話しかけるかが、子供の成長のカギになります。この言葉かけが、非認知能力に関係していることが最近になってわかってきました。非認知能力とは、IQ やテストの点数とは異なり、“数値化できない力”を指します。近年、教育界で注目を集めているので、聞いたことのある人も多いかもしれません。関連図書や論文も多く出ています。逆に、読み・書き、計算など学力をはじめとした“数値化できる力”を「認知能力」といい、認知能力と非認知能力の間をつなぐ力を「思考系能力」と言います。

非認知能力の具体例として、「自分と向き合う力」（自制心や忍耐力など）、「自分を高める力」（意欲や向上心など）、「他者とつながる力」（協調性や社交性など）の3つに分類されます。

これらは、数値化することが困難です。例えば、「友達の〇〇くんは、この前の“協調性のテスト”、90 点とったんだって…。僕は、60 点だから、平均なんだって。」などとは言いません。しかし、人が生きていくうえで大切な能力だということは、親御さんなら実感としておわかりでしょう。

では、非認知能力はどのように身に付けたらよいのでしょうか。ポイントは、幼少期と児童期の環境にあります。また、親との話し方や接し方が、子供の非認知能力に左右すると言われています。具体的には、

（1） 子供が決めたことを尊重する

親の価値観を子供に押し付けない。「〇〇をしなさい」、「□□をやめなさい」などの命令形ではなく、「〇〇してくれる？」、「△△してみたら？」のように問いかけて話すことを心がける。

（2） 見取り、フィードバックする

子供の意識が「結果」ではなく、「プロセス」に向くように働きかける。例えば、子供がハサミの刃の部分を持ち、持ち手側を向けて渡してきたら、その行動を見過ごさず（見取り）、「ちゃんと持ち手側を向けて渡せたね」と言葉にする（フィードバック）。

（3） 何でも先回りをしない

子供を心配するあまり、親はつい先回りして指示してしまいがち。しかし、小さな失敗こそが成長の糧になると思って、しっかり見守る。例えば、子供が転んだ時、「だから危ないって言ったでしょう！」と責めるのは避けたいものです。「転ぶこと＝失敗」という価値観を植え付けるより、「転んだら痛い」と経験する機会も大切でしょう。大けがにならないよう、転ぶ時に地面に手をついていたら、「転び方が上手になったね」と言ってあげてください。

子どもの意思を尊重し、小さな行動にも気を配り、先回りせずに待ってみる、シンプルですが、いざ実践するとなるとなかなか難しいでしょう。右図はセルフチェックを用意したので、15項目中、30点以上の場合は、親御さんご自身が、言葉かけを見直す必要があると思われます。

子どもへの言葉がけ
セルフチェックシート
合計30点以上の場合は要注意。言葉がけの仕方を今すぐ見直して
あてはまらない 1 2 3 4 5 あてはまる
1 子どもがやろうとしているのに、先走って声をかけてしまう
2 一度に二つ以上の指示を出してしまう
3 話の一文が長い（途切れないまま話し過ぎてしまう
4 注意する際、以前のことを蒸し返してしまう
5 「でもね」「わかるけど」などすぐに否定や逆接が入ってしまう
6 一つひとつをもれなく確認・指示してしまう
7 叱っている時の自分がどんな状態なのかわかっていない
8 「〇〇な子だね」のような漠然とした指摘をしてしまう
9 「絶対できる」など過度に断定的な言葉を多用している
10 上から目線の言い方で指示してしまう
11 「歩こう」ではなく「走らない」のような禁止の言い方をしてしまう
12 子どもが何かをやっている途中に別のことを言ってしまう
13 子どもが自分の思い通りにならないとイラッとする
14 事あるごとに「誰のおかげで生活できているの？」と言ってしまう
15 怒りすぎてしまったと思っても、子どもに素直に謝れない

おわりに

先日、ある学年の児童の会話を聞いていて、「平日から習い事で忙しい子がいるんだ、疲れていないかな。」と感じました。 かくいう我が家も子供が小学生の時はそうでしたが、「月曜はピアノ、火曜、金曜は塾、土曜日は習字」などと習い事を日常の一環としてこなしている家庭は多いのではないでしょうか。

親の本音としては、家でダラダラされるくらいなら習い事をさせてみようという場合もあるでしょう。習い事が多すぎて、負担になっていないでしょうか。前向きに課題に取り組む意欲的な子ほど、トライ＆エラーを恐れず、自らの能力を発見していくものです。仮に、今の習い事をやめることになってもそれまでに得た経験を大切にしてください。